

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- ラオスプログラム報告会 1~2
- ラオス図書プログラム 3
- IRM訪問(ネパール) 4
- ネパール家族紀行 5
- ネパールスタディツアー3 5
- CWCC報告(カンボジア) 6
- クラフト生産者紹介 第3回 ホアイホンセンター 6
- ミャンマー情勢 7
- 地球の木と私 7
- インフォメーション/活動日誌 8
- 編集後記 8

地球の木ラオスプログラム報告会(10/2)

「なぜ今ラオスの支援をするのか？」
 ~ラオスの森と私たちのつながり~
 ゲスト:日本国際ボランティアセンター 岩田 健一郎さん



世界のあちこちで、貧困や格差、人権問題に苦しむ人々は後を絶ちません。問題がおきるたびに各地で様々な支援活動が展開されますが、そうした対症療法だけでは根本的な解決には至りません。私たちの求める「便利で快適な暮らし」と世界の抱える貧困、格差、人権、さらに自然環境破壊、資源の枯渇といった喫緊の課題は表と裏の関係だからです。

地球の木は、20数年にわたり日本国際ボランティアセンター(JVC)が推進するラオスの村人の生活安定のための森林保全活動を支援し、そこから得られた貴重な気づきや学びを広く発信・共有して、日本の私たちのライフスタイルや消費行動を見つめ直すことを目指してきました。

そうした地球の木の活動の一環として、10月2日、JVCの海外事業グループマネージャーでラオス事業担当の岩田健一郎さんをゲストに迎えて「地球の木ラオスプログラム」報告会を開催しました。20数名の参加者があり、初めに地球の木が、ラオスの村を撮影した写真を使って村の暮らしを紹介。続いて岩田さんの興味深い現地活動報告を聞きました。

熱心な意見交換もあり、普段なじみのないラオスや、そこで進められている「開発」について参加者の方々の理解が深まる機会となったと思います。以下は報告会の概要です。

ラオスの村の暮らしを紹介(地球の木)

田んぼで主食のもち米を作り、家庭菜園で野菜を育て、あとは近くの森や川に食料を調達しに出かけるという自給的な暮らしを今も送っている。

ラオスの村の暮らしを表す言葉としてよく聞くのは、「森はお金の要らないスーパーマーケット」とか、自然の至る所に精霊が宿ると信じて祀る「精霊信仰」や「奪わない暮らし」などがある。そして今となっては、環境と調和し奪いつくさない暮らしを実践するSDGsの最先端を走る「周回遅れのトップランナー」こそピッタリかもしれない。とはいっても、押し寄せる「開発」の波に洗われる目の前の現実。JVCと村人たちのチャレンジに期待したい。

■今、ラオスで何が起きているか

まずは最近のラオスのニュースから。2020年12月に初めての高速道路が、翌年には高速鉄道が中国の支援で開通。高速道路でトンネルを通ったとき、バスに乗っているみんなが「ウオー」という声を上げた。トンネルは初体験なのですね。高速鉄道のピエンチャン駅はまるで空港のような立派さ。古都ルアンパバーンまでバスで10時間だったが、これに乗れば2時間で行ける。発展著しいラオスの一面だ。

JVCは、カムアン県、サワンナケート県の後、今年に入ってセコン県で新しいプロジェクトを始めた。セコンはラオスの中でも最も小さく貧しい県の一つ。東部はベトナムに国境を接している。活動の対象はラマーム郡とタテン郡の10村、約1,600世帯。セコン県の中心を流れるセコン川にかかる大橋は日本が建設したもの。豊かな自然と少数民族が多いのが特徴。

火力発電、ダム建設

社会主義国家のラオスでは基本的に土地は国有。外国の企業に土地の使用を許可するのは国であり、村はなかなか拒絶できない。石炭火力発電の中国企業が入ってきて強制移住をさせられた村、また水力発電のダム建設で、森がすべて伐採され川の魚もいなくなるなど、暮らしに大きな影響を受けている村がある。

換金作物 キャッサバの栽培

3年前からキャッサバ栽培を始めたという村は、隣接の山もキャッサバで埋め尽くされている。「10年前は米も十分あり自給できていたが、ゴムプランテーションで土地を取られ世帯数も増え、今ではお金を稼いで米を買う生活。キャッサバは地質が悪くなるが他に選択肢がない」と村長。キャッサバ栽培はタピオカブームに乗って広がったが、価格は不安定。この地域はコーヒーが有名だったがキャッサバに変わろうとしている。

ゴム林の中に村がある

ベトナムのゴムプランテーションが進出してきているタテン郡の2つの村の村長の話。一人の村長は「2004年からゴムプランテーションが入ってきた。行政との契約を盾に会社は我々を相手にしない。いつの間にか耕地が拡大、補償もない。ゴムの悪臭。農薬の被害。排水の影響で川の水が飲めなくなった」と訴える。また、もう一人の村長は「会社のゴム林で働くというのと、自分の土地にゴム林を作ってそこで収穫したのを会社に売るといふ、二つのパターンがあるが、価格が不安定で、会社に搬入した時に収穫量をごまかされる」と憤る。

暮らしを襲う大きな変化

ある村長の言葉は象徴的だ。「前は生活も簡単だった。まわりからすぐに食料を得られた。今はその環境を失った。どこで魚を買うか、どうお金を稼ぐか、毎日毎晩お金のことを考えなくてはならない」。



■JVCが新しい支援村でしようとしていること

「公害から身を守る、補償を受ける」という権利を誰もが持っているんだということを住民自身に自覚してもらう。そして、住民の共有資源(土地、森、川)を持続的に使っていくにはどう管理していくか、その仕組みを村の人たちと一緒に考え作っていく。以前の活動村では、「コミュニティー林」を住民と一緒に作り、行政登録し、規則や範囲など示す看板を設置した。住民から「開発事業が来ても反対しやすくなった」という声が聞かれた。この意識の芽生えというのがすごく大事。

■ラオスの人たちだけでなく、我々にも突きつけられている課題

たくさんの開発事業や換金作物の問題で「将来、村が生き残るのは難しいだろう」と言った村長がいた。限界がある自然環境の中で、どうやって持続的に安定した暮らしを作っていけばいいのかという課題に、正にラオスは今直面している。しかし、もっと広い人類ということを考えると、我々も同じように、環境の限界にどう向き合っていくといいのかを突きつけられているのではないだろうか。

|| 意見交換 ||

●ラオスの村でこれから大事なのは、問題をよく話し合っ
て総意を固めていく事だと思うが。

岩田 できている村もあるが、村長がまとめ切れていない村もある。結局はその自治力が鍵だろう。そして現地の行政官がキチンと住民側をサポートできるようになっていく事。法律自体は整ってきているがその運用がまだできていないのが現状。

●ラオスに自分たちの産業を生み出す動きはないのか。

岩田 様々な理由から、企業、産業が育たない。国としても力を入れようとしているが、事業を起こそうとする人材が育っていない。

●秦野では、山にケーブルカーを通すという話が持ち上がっている。市はどんどん話を進めてしまう。ラオスと同じで、自然がなくなったら人は住めない。しかし何もしなければ過疎になってしまう。

岩田 「声を上げていく」というのが大事。ラオスでは、それが色々な事情でできない。それができるよう、我々も村の人たちと一緒に活動していきたい。

(ラオスチーム 中野 真理子、斎藤 和子)

〈ラオス図書プログラム〉広がる“子どもたちの未来への想い”

ALC現地事務所兼図書館とスタッフの紹介

地球の木が支援するNPO法人「ラオスのこども」(Action with Lao Children、以下ALC)は、設立40年。ラオス全国で、340カ所の図書館(室)の開設、ラオス語の図書出版、子どもセンターの支援をしてきました。これらの活動の拠点が、ALCラオス事務所兼図書館です。この場所は、「図書館」「事務所」だけでなく「子どもの居場所」「図書館発展のための実践・学びの場」にもなっています。現在、5名のスタッフがいますが、今回はバンロップ・オンブヴィライさん(勤続9年)の想いをご紹介します。

バンロップさん:僕が今、ALCにいるのは、子どもの頃にALC図書館に出会って、絵本の面白さ、図書館の楽しさを知ったから。中学のとき、僕の家は貧しくて友達とメコン川沿いで空き瓶を拾ってお金に換えていたんだ。その帰りがけに、ALC図書館があるのを見かけて、別の日に自分一人で訪ねてみた。そしたら、たくさんの絵本があって、今まで見たことも触ったこともなかったから、本当に楽しくて夢のようだった。

それからは、毎週図書館を訪れるようになった。その時、お気に入りだった本を覚えているよ。タイトルは『どうしてフクロウはグーフグーフと鳴くの?』。大好きだったから、借りて学校に持って行ってみんなに見せたいくらい。高校卒業後は、仕事をしながら、夜間大学で社会開発について学んだ。お酒を売る仕事をしていただけだけど、「子どもたちとかかわる仕事がしたい」と思っていて、ALCがスタッフ募集をしているのを聞いて、「僕のしたいことはこれだ!」ってね。

ALC図書館に来る子どもたちにも、自分が子どもの頃に体験した、図書館や絵本に触れる楽しい幸せな時間を、いっぱい味わって、大きくなってほしい。

(ALC図書館存続クラウドファンディング記事より抜粋)



バンロップさんと絵本『おおきなかぶ』

ALC図書館では、読書だけでなくお絵描きや工作をしたり、映画鑑賞やスタッフとお料理をしたり。家、学校に続く第3の居場所です。そして、スタッフにとっては、「図書館応用研修」での新しい取り組みを最初に試す、図書館活動の実習・実践の場でもあります。

地球の木支援の図書館応用研修が始まりました!

10月半ばより、「図書館応用研修」が、ヴィエンチャン県の中等教育学校で始まりました。図書を教科に活かすアイデアなどの実践的な研修を日本の図書館専門家からオンラインで学び、バンロップさんをはじめALCスタッフが互いに情報共有をしながら研修が進んでいます。10月20日の地球の木事務所でのラオス語翻訳貼付活動中には、その研修に参加しているたくさんの先生たちの様子をオンラインで見せていただきました。

現在、ラオスでは小学校の入学率は100%近くになっていますが、試験をパスしないと進級できないため、小学校に入学した子どものうち、無事に卒業できるのは8割に留まっています。子ども達の学力向上のため、教科書以外の本に触れられる図書館は貴重な場所です。応用研修の成果は次回の会報誌でご紹介したいと思います。

国内活動報告・ラオス語翻訳貼付作業



貼付ボランティア@はたらっく・ひらつか

絵本のご寄付、ボランティア活動へのご参加を心より感謝いたします。一人ひとりの力が集まり、11月15日現在、以下のように活動が進んでいます。

寄付絵本:111冊 貼付終了絵本:81冊

ボランティア参加数:のべ80名

貼付活動は地球の木事務所では毎月2回、その他ご自宅近くでの開催など、できることをできる人が進めてきました。今年度、残り少ないですが、引き続きご支援をよろしくお願いたします。

活動予定 12月5日(月)・22日(木)

(ラオス図書プログラム 相馬 淳子)

久しぶりにネパールを訪れて

コロナ禍の3年間、現地を訪問することができず、新しい支援地はどんな所だろうと想像するばかりでしたが、この度プライベートでネパールを訪れたチームメンバーが支援地まで足を延ばしてくれました。以下インドラサロワール農村自治体(IRM)の報告です。

今回、私はSAGUNマハントさんの案内で新しい活動拠点のIRMへ行ってきました。2021年から始まったIRMでの主な活動は、学校を中心に行う教育支援です。連れて行ってもらったのは政府が建てた「セカンダリースクール」。いわゆる小学校から高校までを合体させたような公立学校です。

最初に訪れた学校は“Mahachuni Secondary School”です。この学校の特徴はネパールでは珍しく小学校1年生から6年生までの子どもたちに学校給食を提供するということです。日本では当たり前ですが開発途上の国で給食を学校で提供するのには珍しく、貧しい家庭の子どもたちの中にはこの学校給食が1日の食事の中で最もまともな食事というケースが少なくないのです。子どもたちはこの給食を食べたいがために学校に毎日通うようになり、お陰で授業の出席率が高く習熟率向上に貢献しています。

コンクリート
パネルの卓球台で
Let's play!



Mahachuni Secondary School

もう一つの学校は“Kalika Secondary School”です。この学校の特徴は「農業専門学校」ということです。政府系の公立学校で「農業専門学校」は珍しいと思い、どういう経緯で専門学校ができたか尋ねると、「元々は普通科の“セカンダリースクール”でしたが、地元の人や地方政府の役人が、『この地域は農業を生業にしている親がほとんどだから、その子どもたちには農業技術や農業ビジネスを学ばせた方がいいだろう』ということで、9年生から12年生迄の高学年を対象に農業技術の授業を行うようになった」というのです。さらに驚いたことにこの学校の農業専門学校部分はネパール政府で

なく、地方政府がお金をだして建物を建て、運営しているということです。つまり政府系の公立学校を土台に地方政府が「農業専門学校」に作り替えた、中央政府と地方政府の合作の学校ということです。この学校は広大な校舎外の敷地が農地になっており、色々な野菜や果物の栽培方法を学び、野菜作りを実践していますが、単に野菜作りをするだけでなく、この野菜はどのように加工したら美味しくなるか、どのような野菜が好まれるかなど消費者の立場から野菜作りを行い、常に農業ビジネス的な思考も授業の中に取り入れているということです。

ある教室の前に2メートルくらいの大きな機械があったので、これはどのように授業に使われているのか尋ねたら、これはミキサーマシンで、自分たちが栽培したトマトやニンニクなどをこの機械にかけて“アチャール(漬物)”を作り、どのような味に仕上がるかテストするというのです。この学校で農業を学んだ生徒が近い将来この場所で野菜作りを始め、地元で野菜作りでの生活基盤ができれば、都会のカトマンズや海外へ出稼ぎに行く必要がなくなり、田舎の過疎化対策にも貢献できる、とても画期的な取り組みだと感じました。



Kalika Secondary Schoolの大きなミキサー



トマトの
アチャール

この二つの学校とも山の僻地にありながら、色々な面で恵まれており、教師、保護者、子ども達について前向きで積極的な印象を持ちました。そして、明るい光がさしているのを感じました。
(ネパールチーム 勝田 文隆)



左からマハントさん、アドバイザーのサララさん、Kalika Secondary School校長、筆者

2022年夏ネパール家族紀行

磯野 昌子

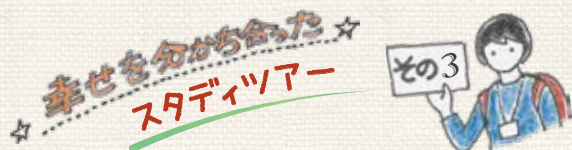
今年8月、家族でネパールに8年ぶりに帰郷した。私の夫はネパール人で名前もネパールさん、今年から地球の木のネパールチームでも翻訳や通訳を手伝ってくれている。結婚して22年。ネパールで出会ったが、結婚してからはほとんどを日本で暮らしているため、普段はネパールの家族や親戚と私自身は距離をおいている。その代わりに、ネパールに帰郷する時は大量のお土産を持って、途方もない数の親戚周りをすることになる。

子どもが幼い時は親戚周りが苦痛だった。私は外人で分からないからと嫁の仕事も放棄していたし、子どもを泣き止ませられないでいると、女性たちの集団に笑われ、私の耳にはついていけないネパール語で悪口を言われているように思えた。そもそもカーストが根付いている社会で、祭司カーストである夫の親戚からは結婚にも反対されていたし、穢れるからと家にいれてもらえなかったこともある。

しかし今回は、子どもたちも中学生と大学生になり、カトマンズに家も建てたので余裕をもって帰郷した。旅の第一の目的は、父親の国であるネパールを知らない子どもたちに、一週間かけて観光名所をめぐりながら全国各地の親戚周りをすることだった。義母と義妹、甥っ子も連れて行った。インド国境に近い南部のチトワン国立公園で象に乗り、釈迦の生誕地であるルンビニを歩き、パルパ郡にある

夫の生家で郷土料理を食べ、ポカラのベワ湖でボートに乗り、サランコットの丘からヒマラヤを一望し、パラグライダーで空を飛んだ。カトマンズでは、目玉寺のあるボダナートで、10年前に我が家にホームステイをした元SAGUNスタッフのサルバジットさんと再会し、一緒にガイジャトラ(牛の仮装をして町を練り歩くネワール族の祭り)に驚愕し、古都バクタブルで世界遺産の街並みを散策した。

もう家族でこんな旅行をすることは二度とないだろう。言葉が通じず初めは緊張していた子どもたちも、旅を続けるうちに従兄弟たちと笑いあい、すっかり仲良しになった。私もここぞとばかりネパール語の練習と思って親戚たちの会話に入り、親戚の関係性と名前を覚える努力をした。誰もが私たち家族を歓迎して、家に泊めご馳走をしてくれた。私の両親は既に他界しており、日本の親戚づきあいはほぼ無く、子どもたちにも従兄弟がいない。しかし、ネパールにはこんなにも温かい家族(親戚というより家族なのだ)がたくさんいることにあらためて気づき感謝の気持ちでいっぱいになった。コロナでいつ誰を失うか分からないご時世だからなのか、誰をも愛おしく感じられた。汚くて臭くて貧しい国という子どもたちの思い込みを変えたいと思って行った旅行で、私自身がネパールを再発見し、親戚の一員であることを喜びに思い、結婚に感謝できた二週間だった。



スタディツアーでの村人との交流は様々です。2010年のツアーでは識字教室に参加している女性たちとカルタ取りをしました。日本を紹介する写真の下にネパール語の単語を添えた、大きなカルタを作りました。私たちは、練習したネパール語で単語を読み上げ、女性たちが取る、という趣向です。カードは人形、山、食べ物、都市など、そしてネパールにはない海もありました。



識字教室の女性たちとカルタ取り

2018年には、ある少年の元服祝のようなお祭りが開かれていて、村中の人々がきれいな服をまとって集まっていました。音楽がガンガン鳴っているのに踊っている人はいません。促されて私たちが踊り出すと



踊りの輪が広がる

村の人たちも輪に入り、男性も女性も子どもたちも、何曲も何曲も踊りました。見ている人たちも笑顔。次の日、村ですれ違う人たちはみんな、踊る仕草をして挨拶してくれました。

スタディツアーが終わった後、現地パートナー、カマルさんから来たメールの一節を紹介しましょう。

「つい最近村を訪れ、一晩泊まって村の友人たちと話す機会がありました。地球の木メンバーと触れ合ったすべての村人たちが、皆さんのすばらしい印象を嬉しそうに語ってくれました。皆さんのよいところを飽きもせず話し続けていました。ツアーメンバーの親しみのある態度が、ムーブメントをさらに推し進めてくれたことに感謝します」。

(ネパールチーム 丸谷 士都子)

カンボジア女性緊急救援センターからの報告

カンボジア女性緊急救援センター(CWCC)より2022年1月から9月の活動報告が来ました。

新型コロナは、特に社会的に弱い立場の人たちの生活に大きな影響をもたらしました。CWCCはこの期間、DV 3名、性的虐待 2名、人身売買78名の被害者(サバイバー)の女性や少女の受け入れを行いました。コロナ禍以降、人身売買による被害が増えているのは昨年と同じです。

シェルターで生活すると衣食住が保証され、社会復帰のために必要な訓練や法的措置も受けられます。しかし、コロナ禍で仕事もなく、生活が困難な家族を養うために家に残ることを選んだサバイバーもいました。そのため政府の関連部署からは、CWCCに対して、被害者支援に対する積極性に欠けていると指摘を受けることもありました。対応策としてCWCCは、家庭に居る方が良いというサバイバーやその家族には、シェルターで生活することで、職業訓練や識字教育、カウンセリング等を受けられることなど、ここで得られる価値を伝え、シェルターでの生活を促しています。

地球の木への支援

地球の木からの支援金(3,000ドル)では、20名のサバイバーが自立するための生活支援、8名の医療支援、81名の職業



自立のための生活支援品を手渡す

訓練、そして今年受け入れた83名全員の日々の食事をサポートすることができました。自立するための生活支援とは、自立後当面の間、必要なお米ひとり50kgやキッチン用品などの支援です。職業訓練はお菓子作りや縫製、手芸などを学び、技術を身につけ就職につなげます。ここでの生活で、彼女たちは将来自分で生きて行くために必要な力を身につけます。私たちの支援で巣立った20名が同じ被害に遭うことなく、自分の力で歩いていくことを願っています。

(カンボジア担当 成瀬 悦子)



クラフト生産者紹介 その3

ホアイホンセンター(ラオス)



ホアイホンセンターの織子さんたち

地球の木「幸せ分かち合いクラフト」で扱うラオス伝統織物は「ホアイホンセンター」の作品です。創設者、チャンタソン・インタヴォンさんは、図書活動を行うNPO法人「ラオスのこども」代表でもあります。どのような経緯で、この2つの活動を並行して継続しているのか、尋ねました。

ラオスで生まれ育ち、国費留学生として来日。日本の図書環境に感銘を受け、1982年、ラオスの子どもに絵本を送る活動を開始。その活動資金を集めるため、ラオス文化と伝統織物の紹介、販売を始めました。1992年に雑誌「銀花」にラオス伝統織物の価値の高さが掲載され、その反響で横浜のシルク博物館など日本国内での展示会を行い日本との繋がりが深まりました。JICAの支援の下(1998-2001)伝統染織技術の



天然染色による多彩な糸

継承と、女性の地位向上を目的として首都に「ホアイホン職業訓練センター」を設立。現在は独立し、染織製品販売や観光客の染織体験費などで運営しています。

製品の特徴は、豊富な色合いを醸し出す植物染色。フラン

ス植民地時代に化学染料が入り、伝統的な天然染色は衰退の一途を辿っていましたが、昔の布を先生に、見事に復活・継承しています。染色は重労働のため男性職人が行い、その糸を織り職人が、模様作りから仕上げまで織り上げます。高機へのタテ糸の模様作りは非常に手間がかかり、複雑なものは、模様作りに2ヵ月、織り上げるのに2ヵ月、合計4ヵ月もかかる作品もあります。

製品の売り上げは、職人の活動継続・ラオス伝統染織技術継承に繋がります。いにしえからの人間の叡智が詰まった芸術品とも言える染織作品をご覧ください。地球の木では、センターの製品を事務所、生活クラブ生協および福祉クラブ生協の共同購入などで販売しています。(クラフト 相馬 淳子)

深刻度を増すミャンマー情勢、 変わらない日本政府

メコン・ウォッチ 木口 由香

この原稿を執筆している時点で、ミャンマーで国軍がクーデターを起こしてから1年と9ヶ月が経過した。未だに国軍の残虐行為は続いている。

9月16日に国軍はザガイン管区域で民主派勢力が運営する僧院学校に空爆と攻撃を行い、学校にいた子どもたちを殺害した。この空爆について、国連の独立調査団は「戦争犯罪や人道に対する犯罪として処罰されうる」と批判している。10月23日の夜には、北部カチン州でコンサート会場を空爆し、およそ60名を殺害したと報道されている。クーデター以降に殺害された人はNGO政治囚支援協会(AAPP)に確認されているだけでも2,388人にのぼる(10月24日時点)。ミャンマー全土ではクーデター以降に避難民となった人は、およそ100万人とみられ(9月12日時点)、まだ知られていない悲劇が、各地で起きていると見られる。

ミャンマーは国軍のビジネス網が隅々まで広がっている国である。国軍の暴力が続いているにも関わらず、日本政府は国軍と関係する問題のある事業を継続したままだ。ヤンゴンでの複合不動産開発・Yコンプレックス事業には公的資金からの出資・融資があるが、参画する現地会社が兵站局と土地の賃貸契約を結び、その賃料

は国軍の管理下に入るとみられる。イェタグン・ガス田では、日本政府は事業の10%程度の権益を保有し、ミャンマー側と共に収益を得てきた。これら事業に関係する一部の民間企業は事業の中断や撤退を決めたが、日本政府はイェタグンを除き、公的資金を引き上げる様子が見えない。

ODAのバグー橋建設では、国軍系企業が事業に関与している。また、ODAの継続は、別の懸念を生んでいる。国軍との経済関係がなくとも、道路等のインフラが建設されれば、国軍の軍事作戦に利用される恐れもある。そして、日本の巨額な資金援助の継続は、日本政府が暗黙のうち国軍を支持する表明だ、と民主化を求めるミャンマーの人びとに受け取られている。実施中のODAは、有償資金協力(円借款)だけでも約7400億円にのぼる。これをどうしていくのか、日本の主権者として私たちの責任も問われている。

「メコン・ウォッチ」について

メコン・ウォッチは、東南アジアのメコン河流域の開発や経済協力が、流域の人々の生活を脅かさないように、調査研究や開発機関への働きかけを30年近く行っているNGOです。

要請書「日本政府の対ミャンマーODAの停止を求めます」

メコン・ウォッチ他4団体が呼びかけ、地球の木を含む15団体が賛同した要請書が10月4日に日本政府に提出されました。以下、要請書の抜粋です。

「クーデターから1年8ヶ月が経過しましたが、ミャンマー国軍は国際犯罪にも相当する深刻な人権侵害を続けています。私たちは、日本のODAが国軍を利することにより、日本が国軍による人権侵害に加担する可能性について深い懸念を示し、日本政府がこれまで実施済みのODAに関してモニタリングに責任を持ちつつ、人道支援以外の実施中のODAをすべて停止することを強く求めます」



「地球の木ではボランティアを募集しています」こんなチラシが生活クラブ生協の配布物に入っていたのが、私と地球の木の出会い

でした。それまでは、社会貢献したいと思いつつも、勇気？タイミング？または勢いでしょうか、何かが不足していたのでしょう。1年半ほど前にそういった事が全て整って、事務局での事務作業のお手伝いが始まりました。人生初の「ボランティア」です。仕事帰りに毎週1回、約1時間。寄付で集まった切手を数えたり、クラフトや会報誌の発送作業などなど。できることをほんの少しず

つですが続け、間接的にはありますがアジアの人たちへの助けに繋がると思うとやりがいも感じています。

今年度は、ラオス図書チームから一緒に活動してみませんか？とお誘いをいただき、参加しています。貼付ボランティアの方々と交流したり、絵本について情報交換したり、それまでとは全く異なる新しい経験もさせていただいています。できることをできる範囲で、という思いが積み重なることで、より大きな力になっていくのをこれらの活動で目の当たりにしています。地球の木が、長い間にしっかりと大地に根を張って活動を続けているように私も活動していければ、と思っています。

(横浜市南区 藤木 富美子)

年末募金

— 共につくりよう子どもの未来 —

皆さまの日ごろのご協力に心より感謝申し上げます。これからの社会をつつていくすべての子どもたちが多様なまま尊重され、学び、考え、語り、選択できる未来を目指して、地球の木は活動しています。この活動を支える年末募金に今年もご協力をお願い申し上げます。詳細はホームページ、または、チラシをご覧ください。



写真提供：JVC

地球の木講座

多様な背景をもつ人びと 「共に生きる」社会をつくるために

日時 2023年1月14日(土) 14～16時

会場 スペースオルタ

横浜市港北区新横浜2-8-4 オルタナティブ生活館B1 ※新横浜駅から徒歩6分

講師 鈴木 江理子さん

(国土館大学教授、NPO法人移住者と連帯する全国ネットワーク 共同代表理事)

参加費 500円

申込 地球の木事務局



地球の木カレンダー2023

「つなげよう 笑顔のバトン!!」

カレンダーの販売は今年で最後となります。最後のカレンダー、ぜひご協力ください。

- 写真：三井 昌志さん
 - 制作元：日本国際ボランティアセンター（JVC）
 - 価格：[壁掛け] 1,600円(税込)、[卓上] 1,300円(税込)
- ※カレンダーの収益は、地球の木の国際協力活動に使われます。

好評
発売中

活動日誌(9月～11月抜粋)

9月

- 3日 第3回通常理事会
- 8日 ラオス図書貼付活動
@アサバアートスクエア
- 9日 ICT研修
- 22日 ラオス図書貼付活動@地球の木

10月

- 1日 相続セミナー
- 2日 ラオスプログラム報告会
ゲスト：岩田 健一郎(JVC)
- 3日 ラオス図書貼付活動@地球の木
- 12日 ラオス図書貼付活動
@はたらっく・ひらつか
- 15日 第4回通常理事会
- 20日 ラオス図書貼付活動@地球の木
- 25日 中間監査

11月

- 5日 SDGsよこはまCITY秋
・ネパールプログラム報告会
・ラオス図書プログラム講演会
講師：渡邊 淳子(ラオスのこども)
- 6日 鎌倉国際交流フェスティバル
- 7日 ラオス図書貼付活動@地球の木
- 12日 東日本復興まつり
- 14日 ラオス図書貼付活動@地球の木
- 14日 ICT研修
- 17日 東寺尾デポ-展示会
- 19日 第5回通常理事会
- 24日 ラオス図書貼付活動@地球の木
- 27日 ひらつか市民活動まつり



寄付領収書について

地球の木へのご寄付は、所得税等の控除対象になります。

寄附金控除を受けるためには、地球の木が発行する「寄附金受領証明書」(領収書)を添えて、確定申告する必要があります。2022年の領収書は確定申告に間に合うよう、2023年1月下旬にお送りいたします。

また、地球の木ではサポート会員の会費も控除対象となります。サポート会員の会費はお申し出いただいた方のみ領収書をお送りしておりますので、必要な方は事務局までご連絡ください。



◆あれほど憤り、心を痛めたミャンマーの事がすっかり頭から離れてしまっていた。ちょうどその1年後に起きたロシアのウクライナ侵攻に世界中の注目が集まり、ニュースが一気にそちらに移ってしまった。報道が少なくなり、つい遠のいていたが、依然、深刻であることをメコン・ウオッチの寄稿で知った。以前、多文化共生の集まりでヘイトスピーチについて話し合った時



の「攻撃される側は勿論、攻撃する側、傍観する人たち、全ての心に大きな傷を残す」という言葉が忘れられない。ミャンマー、ウクライナで起きている事。結果はどうなるにせよ、多くの人々に大きな心の傷が残ることは間違いないだろう。(M.H)



特定非営利活動法人
地球の木